19世紀から20世紀前半期までのソウル・京畿地域の 寺院大房の外部空間に関する研究

A STUDY ON THE CHARACTERISTICS OF OUTER SPACE OF DAEBANG BUILDING IN BUDDHIST TEMPLES OF SEOUL AND GYEONGGI PROVINCE FROM THE 19TH TO THE MID-20TH CENTURY

金 成 都*
Seong-Do KIM

The study on the characteristics of outer space of daebang in Seoul and Gyeonggi province could be summarized as follows:

1. In the central domain of temples having been composed of both a main temple and a daebang, the former was regarded as a practical or symbolic worship object of the latter and these two buildings were settled within the distance of 75ft each other. It is the maximum length between a stage and an auditorium that we can see and listen to the actors on the stage.
2. In case of daebang with side wing room(s), the degree of view looking downward at the front window of it was usually within the limit of 30°, which was the downward angle of easy view permitting us to look out without any movement of one's head or eyes.

Keywords : Daebang, Yeombuldang(i.e. Building for praying to Buddha), Korean Buddhist Temples, Modern Times

大房, 念仏堂, 韓国寺刹建築, 近代期

1. 序論

1.1 研究の背景及び目的

ソウル・京畿地域の寺院に建立された大房は朝鮮時代末期の念仏盛行と接待重視という社会的状況にしたがって仏堂の前に位置した楼を機能的に分化発展させて念佛用法堂で構成した念仏堂であった。

この大房は当時、坐禅堂及び講学堂と共に三つの法堂の一つとして寺院の中心領域に構成され、万日会田畝¹⁾のような別途の経済的基盤を整えて、化主という役僧の責任にて寺院の中では完全に独立的に経営されたのである²⁾。これによって建築の空間構成が影響され、仏殿にも関わらず生活ができるように台所や僧房施設などを共に備えた。

この論文はこのような大房³⁾を対象にして、外部空間の分析を通じて、その特性を考察しようとする。これにより当時韓国に形成された様々な建築空間特性の中で、大房がある寺院の空間特性を知るものである。

1.2 研究の範囲及び方法

この研究では19世紀の純祖朝からソウル・京畿地域の寺院で新たに登場した複合仏殿になる大房を対象にして、その外部空間で見える建築特性を考察しようとする。このために19世紀から20世紀前半期まで建立されたもので現存するソウル・京畿地域の20個所の寺院(主仏殿と大房が共に構成された15個所の寺院と大房が主仏殿になる庵子規模の寺院5個所)の大房を対象として分析した。これらを整理したことが表1である。

表1に現れた20個所の寺院の大房の中で18棟は19世紀から1910年以前

まで建立されて現存するもので、残りの2棟は日帝強占期に建立されて現存する大房である。記録を通じて日帝強占期にも多数の大房が建立されたことがわかるが⁴⁾、現存するものはただ奉恩寺、開運寺、興國寺(高陽市所在)の3個所の寺院でしか見られない。ところで開運寺の大房の場合移建される時、部分的に原形がかなり変形されて、本来の配置を把握することができなくなったので、この研究では奉恩寺と興國寺⁵⁾の大房だけを研究対象にした。従って日帝強占期に建立されたもので分析可能な大房の場合、2棟だけなので、この以前に建立された朝鮮時代以来の典型的な大房を中心にして分析しながら日帝強占期に建立された大房に対しては空間特性の変化の有無だけを確認することにした。

この研究と関連して先ず2章では大房の空間構成と類型について考察する。次に3章では大房の外部空間特性として大房構成寺刹の進入特性、大房と主仏殿との相互間距離分析及び大房前後面の庭の大きさ分析などを通ずる視知覚的空間特性に対して分析し、4章で結論を出す。

2. 大房の平面空間構成及び類型

ソウル及び京畿地域の寺院に建立された現存する大房の中でその沿革が確実なもので一番古いのは1812年にたてられた天竺寺の大房である。

このような天竺寺の大房と共に19世紀以来の現存する大房を対象にして各構成空間を表2で整理した。

表2にて大房の平面空間を構成する要素を探れば、クンバン(モンチェ⁶⁾の大きい念仏用房)、モンチェの前面とか後面或いは前後面に形成される

* 日本大学理工学部建築学科 客員研究員・博士(工学)・建築士

A. Researcher of the Dept. of Architecture of Nihon University, Dr. Eng., A Registered Architect

表 1. 研究対象建築物

対象建築物	位置	建立年代	備考	寺院類型
見聖庵大房	南楊州市 龍乾面 松陵里 山 311	哲宗 11年(1860)	- 雨花樓記を通じて高宗19年(1892)の重修記録が見られる。 - 龍乾寺は高麗初めに登壇趙氏始祖侍中孟公が修行した場所で修養道とも言う。	主仏殿と大房が共に構成された寺院
龍宮寺大房	仁川 咸鏡道 咸鏡南洞 657	高宗 元年(1864)	- 伝灯寺本末寺誌で記録が見られる。 大房 11坪 / 観音殿 5坪	
興天寺大房	ソウル 城北區 飲岩2洞 595	高宗 2年(1865)	- 哲宗4年(1853) 極楽宝殿 重修	
華溪寺大房	ソウル 道峰區 水陰1洞 487	高宗 3年(1866)	- 高宗7年(1870) 大雄殿 重建	
普光寺大房	坡州郡 光澤面 置地里 山 13	高宗 6年(1869)	- 98年重修当時見付けた上樑文の記録を通じて1869年に三創されたことが知られる。 - 高宗35年(1898) 大雄宝殿重建	
興國寺大房	南楊州市 別内面 徳松里 331	高宗 7年(1870)	- 純祖21年(1821) 重建後焼失された大房再彫及び大雄宝殿重建	
慶國寺大房	ソウル 城北區 貞陵3洞 753	高宗 7年(1870)改築	- 1914年 極楽宝殿再築	
奉永寺大房	南楊州市 峰峰邑 内蘭里 148	高宗 14年(1877)	- 高宗14年(1877) 寺院重修 - 1924年と1968年重修 - 1971年大雄殿前面の大房を現場所へ移建しながら台所をコンクリート造に構成	
彌陀寺大房	ソウル 城東區 玉水洞 385	高宗 21年(1884)	- 哲宗13年(1862) 極楽殿再築	
清源寺大房	安城郡 元谷面 聖恩里 397	1908年	- 1908年作られた題名を通じて建立年代推定。大房40坪 大雄殿は朝鮮後期建築物	
龍門寺大房	楊平郡 龍門面 新店里 625	1909年	- 高宗30年(1893) 寺院重修以後1907年日本人の寺院放火 1909年大房重修。1910年七重閣を敷いて大雄殿を 6・25戦争時、大雄殿と大房(観音殿)だけが戦禍を免れる。 1983年大房補修当時台所の後面に裏舎増築	主仏殿が大房に隣接する寺院
石南寺大房	安城郡 金光面 上中里 508	朝鮮末	- 通月洞碑(1691〜1770)が寺院重興、以後正殿と大房移建 この傾向も含って座る配置ではなくて、直角で折れ曲がって 大雄殿に近づく - 1976年盤山殿の前に座った大雄殿を後面の高い場所に移建	
地藏寺大房	ソウル 銅雀區 銅雀洞 305	朝鮮末	- 高宗15年(1878)と1920年大房重修 東面殿は現在無くなる	
興國寺大房	高陽市 砥直洞 203	日帝強占期	- 寺院の台と呼ばれる、柱の間に柱が使用され、床の一部は長床に構成	
奉恩寺大房	ソウル 江南區 三成洞 73	1941年	- 普光堂とも呼ばれる。 - 内部の仏壇に觀世音菩薩像を奉安して、現在までも念仏儀式を行う。	
天竺寺大房	ソウル 道峰區 道峰洞 549	1812年	- 数度重修。近來は1959年重修	
明寂庵大房	安城郡 二竹面 七長里 845	1828年	- 1828年定実大和尚が大雄殿建立及び明寂庵重修。 この記録での大雄殿は大房を併せてのことと解釈される。 - 数度の重修。柱と礎石以外は変形が甚だしい。	
圓通庵大房	江華郡 江華邑 菊花里 550	1857年	- 1987年解体	
露水庵大房	安城郡 楊城面 芳新里 85	1870年頃	-	
白蓮寺大房	江華郡 河峽面 富近里 248	1905年	- 伝灯寺本末寺誌で記録が見られる。大房24坪(18間)	

退抹楼、台所、責任者になる化主及び念仏僧用僧房、右側⁷⁾の接待用翼楼と左側の僧侶休息用翼楼、それから屋根裏べやとか倉庫のような付属空間がある。その中で全ての大房ではクンパンと退抹楼、化主用僧房、台所、そして付属空間が共通に現れるから最も基本的な構成要素なことがわかる。それからここにクンパン前面へ翼舎が組み立てられる場合もあり、そうでない場合もある⁸⁾。ここに翼舎が構成される場合は右側の接客用翼楼だけ作られる場合と共に左側の僧侶休息用翼楼までも備える場合を見ることができ⁹⁾、またこの様の代わりに抹楼房とか温突房に構成される特殊な場合もみることができ¹⁰⁾。

従って朝鮮時代末期に建立された大房はその空間を構成する基本構成要素に作られる翼舎の数によって三つの類型に大別される。

まず基本構成要素にクンパン前面の左右両側に二つの翼舎が構成される類型で、興天寺、興國寺(南楊州市所在)、慶國寺、天竺寺、雲水庵の場合が当てはまり、これをクンパン前面双翼舎形と言え。

次にクンパン前面の右側に一つの翼舎が構成される類型で、見聖庵、華溪寺、普光寺、興國寺(高陽市所在)、白蓮寺の場合が当てはまり、これをクンパン前面単翼舎形と言え。明寂庵の大房も同じくこの類型に属するが、翼舎の位置が左側に構成されたことがわかる。

最後に翼舎が構成されない類型で、石南寺、龍宮寺、奉永寺、彌陀寺、清源寺、龍門寺、地藏寺、奉恩寺、圓通庵の場合が当てはまり、これをクンパン前面無翼舎形と言え。

これらの沿革が知られている中で、最も古い天竺寺の大房の場合はクンパンと退抹楼、化主¹¹⁾や念仏僧の為の僧房、念仏大衆に食事を提供する台所、それから付属空間の基本的構成要素以外にクンパン前面に左右両側の翼楼まですべて備えていて、大房の成立初期にはこの様な両翼楼を取り揃えた完結となる型式に現れたことが見られる。

表 2. 大房平面構成

寺及び建物名	平面構成	備考	大房類型	寺院類型
石南寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房1)+台所+付属空間	- 僧房は例外的にクンパンと台所の間に位置していて、その前に退抹楼が設置 - 数回の修理に見えて変形が多い。 - 右側後面の僧房2室は後代に増築されたこととされる。	クンパン前面無翼舎形	主仏殿と大房が共に構成された寺院
龍宮寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房3)+台所+付属空間	- 僧房：前殿僧房1、供養主房1、僧房1 - 前殿僧房の前にクンパンの前の退抹楼が続く。		
奉永寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房1)+台所+付属空間	- 僧房はいま聞いてクンパンの一部に変更 - 僧房の前にクンパンの前の退抹楼が続く。 - 1971年に移建する時、台所がコンクリート造に構成		
彌陀寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 台所の前の退抹楼は今無くなる - 台所の前の退抹楼は改築する時取り除いて、今は一箇所のジエ房だけが残っている。		
清源寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房3)+台所+付属空間	- 台所は今ボイラー室と風呂が付いている立式の右所に改造 - クンパンの前後と共に僧房の前後にも退抹楼が構成		
龍門寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 僧房：住持僧房1、菩薩僧房1 - 僧房の前にクンパンの前の退抹楼が続く。		
地藏寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房1)+台所+付属空間	- 僧房はいま聞いてクンパンの一部に変更 - 僧房の前にクンパンの前の退抹楼が続く。		
奉恩寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- クンパンの後ろの退抹楼の場合長床に構成 - クンパンの左側にも退抹楼が構成		
見聖庵大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房3)+台所+付属空間	- 僧房：住持僧房1、総務僧房1、菩薩僧房1 - 台所は今ボイラー室と手洗いに改造	クンパン前面単翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
華溪寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房7)+台所+付属空間	- 今前面の退抹楼はクンパンの一部になる。 - 台所に改築して2室が増加されていて、前の宝華楼も僧房に改築		
普光寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 僧房：住持僧房1、住持僧寮室1、ジエ房2、視座室1	クンパン前面双翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
興國寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 高陽市砥直洞所在 - 僧房と台所はいま聞いてクンパンの一部に変更		
興天寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 97年末に内部を改修する時、台所の一部や雨置棟などが含まれたクンパン1、宗務所1、台所1の室構成に変更	クンパン前面双翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
興國寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房8)+台所+付属空間	- 南楊州市別内面所在 - 1年前内部を改修しながら全体を一つのクンパンに改築		
慶國寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- いま内部を全て聞いてクンパンに使用 - 注の構造を見るにクンパンの前後に退抹楼があったと判断される。 - 左右翼後の前の礎石を通じて過去台所があったことがわかる。	クンパン前面双翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
圓通庵大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房3)+台所+付属空間	- 僧房：住持僧房1、僧房2 - 1985年以来から居住する清敏との面談を通じて室規模及び平面形態把握		
明寂庵大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- いま左翼舎は僧房に改築 - 台所は改造されて今住持寮室や応接室に変更 - 台所の右側の増築空間に台所と洗面室を設置	クンパン前面単翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
白蓮寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房1)+台所+付属空間	- 台所は今事務所に改築 - 右側の翼後は今神楽壇に使用		
天竺寺大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 僧房：住持僧房1、僧房3 - 台所と左側の翼後は今聞いてクンパン一部に変更	クンパン前面双翼舎形	主仏殿と大房に隣接する寺院
露水庵大房	クンパン(前後退抹楼) +僧房(房2)+台所+付属空間	- 正面の翼後は今内部に改築 - 前房を改築して洗面室を設置したので、今僧房6、洗面室1に構成		

— [] の中は元々存在したが、改築しながら異なる室に用途が改まる空間

一方表2で僧房の数を見ると、部屋が一つから八つまで構成されることを見ることができ。ところで大房の中の僧房の場合、間仕切りによって簡単に空間を分離、結合することができる構造的特性により、今の部屋の分割状態が以前の状況と一致したと見ることは困難な側面がある。けれどもこのような場合を考慮しても念仏僧の増減によって様々な僧房数が現われるのを確認することができ、また大房後面の拡張を通じていくらかでも部屋の数を増すことができる平面拡張性を取り揃えた大房の柔軟な構造的優秀性を探れる。

3. 大房の外部空間特性

3.1 大房構成寺院の進入特性

19世紀から1945年までに建立された大房が現存しているソウル・京畿地域の20箇所を寺院を対象¹²⁾にして、進入動線と関連して大房の位置での主要進入方式(図2参照)及び大房の平面空間構成を整理すると表3になる。

朝鮮時代末期に移建して寺院の元の配置がわからない石南寺や1971年大房を移建して配置が変形された奉永寺、1941年に再建されてから当時の配置がわからない奉恩寺、1987年解体されてから当時の配置がわからない圓通庵、そして寺院の中で数多くの変形によって元の状態がわからない龍門寺と地藏寺を除外すると、配置のわかる全て14箇所の寺院の中で10箇所、大房正面に向かって左側進入方式を取っていることがわかる。またこれらの中で日帝強占期に大房が建立された興國寺(高陽市所在)でも同様に左側進入方式を取っていることがわかる。

主仏殿¹³⁾と大房が共に構成される寺院の場合大房の左側に進入して中庭に登って主仏殿及び其他殿閣に達するようになり、主仏殿が大房になる寺院の場合にも大房から其他殿閣へ行こうとする時は大房の左側を通じて各殿閣に行けることがわかる。このような左側進入方式を取った寺院の大房では責任者が住む化主用僧房がプライベートの為に

表 3. 大房構成寺院の進入方式

寺及び建物名	大房類型	進入方式	大房の平面空間構成*	備考	寺院類型
石南寺大房	クンバン前面無翼舎形	-	僧房 - 台所	- 元の配置がわからない。朝鮮末期移築してクンバン前面の左側に大雄殿を置いて、ㄱ字形に配置	主仏殿と大房が共に構成された寺院
龍宮寺大房		左側進入	台所 - クンバン - 僧房	-	
奉永寺大房		-	台所 - クンバン - 僧房	- 1971年大雄殿の前にあった大房を現位置に移築したので、以前の配置把握不可	
彌陀寺大房		右側進入	僧房 - クンバン - 台所	-	
清源寺大房		右側進入	僧房 - クンバン - 台所	- 最近大房の前に駐車場を作った左側進入が主進入になるようにした。	
龍門寺大房		-	台所 - クンバン - 僧房	- 主仏殿と大房が向き合って座れるように構成されたと判断	
地蔵寺大房		-	僧房 - クンバン - 台所	- 変形が酷くて当時の寺院進入把握困難	
奉恩寺大房		-	クンバン - 僧房 - 台所	- 1982年に大雄殿を重創など色々な変化	
見聖庵大房		左側進入	台所 - クンバン - 僧房	- 元は左側進入路が主進入路だったが、最近右側に新たな道を作る。	
華溪寺大房		左側進入	台所 - クンバン - 僧房	-	
普光寺大房	クンバン前面半翼舎形	左側進入	台所 - クンバン - 僧房	-	主仏殿が大房になる寺院
興國寺大房		左側進入	台所 - クンバン - 僧房	- 高陽市茶井洞所在	
興天寺大房		左側進入	僧房 - 台所 - クンバン - 僧房	- 今大房の右側にブロックで傾斜路を作って副進入路形成	
興國寺大房		左側進入	僧房 - 台所 - クンバン - 僧房	- 南楊州市別内面所在	
慶國寺大房	クンバン前面及翼舎形	左側進入	台所 - クンバン - 僧房	- 台所 - クンバン - 僧房 (平面推定)	主仏殿が大房になる寺院
通達庵大房		-	僧房 - 台所 - クンバン - 僧房	- 普達寺に合併されて、1987年12月解体	
明寂庵大房	クンバン前面半翼舎形	右側進入	僧房 - クンバン - 台所	- 今礎石と柱の骨格のみそのまま維持されただけで、数回の重修によって酷く変形	主仏殿が大房になる寺院
白蓮寺大房		左側進入	台所 - クンバン - 僧房	-	
天竺寺大房	クンバン前面及翼舎形	左側進入	僧房 - 台所 - クンバン - 僧房	-	主仏殿が大房になる寺院
雲水庵大房		右側進入	僧房 - 台所 - クンバン - 僧房	- 右側の僧房と翼舎の間に補助台所設置	

* 大房の平面空間構成は大房の前から望む場合を基準にする。

表 4. 主仏殿に対する大房の位置及び主仏殿と大房間距離

寺及び建物名	大房位置	主仏殿と大房間距離L2 (単位m)	備考	
石南寺大房	-	-	- 初めの配置は知らない。朝鮮末移築してクンバン前面の左側に大雄殿を置いてㄱ字形配置構成。1978年に大雄殿を後方に移築	クンバン前面無翼舎形
龍宮寺大房	観音殿前面	(19)	- クンバンの後ろに退間がない類型で、クンバンの後ろの外側の柱の中心線を基準にして距離測定	
奉永寺大房	大雄殿前面	-	- 初めは大雄殿の前に大房が位置したが、1971年大雄殿の前面左側へ移築して本来の正確な大房位置把握不可	
彌陀寺大房	極楽殿前面	8.2	- 正面2間のクンバンにおいて観音殿の姿は右側から認識	
清源寺大房	大雄殿前面	21	- 正面3間のクンバンにおいて大雄殿の姿は中央から認識	
龍門寺大房	-	-	- 大房内の仏壇後面に窓戸が設置されていることから元々大房の後ろに大雄殿が構成されていたと推定。今は大房の前の右側に新築大雄殿が位置するなど、後代多い変形が加えられる。	
地蔵寺大房	-	-	- 今寺院の配置において変形が酷くて主仏殿との位置関係把握困難	
奉恩寺大房	-	-	- 1982年に大雄殿を重創など色々な変化。	
見聖庵大房	羅法堂前面	11	- 正面3間のクンバンにおいて羅法堂の姿は左側から認識	
華溪寺大房	大雄殿前面	17	- 正面4間のクンバンにおいて大雄殿の姿は左側の二番目の間から認識	
普光寺大房	大雄寶殿前面	22	- 坡州郡光漢面靈場里所在	クンバン前面半翼舎形
興國寺大房	興師殿前面	17.5	- 高陽市砥丑洞所在	
興天寺大房	極楽寶殿前面	19.1	- 正面4間のクンバンにおいて大雄殿の姿は正中央から認識	クンバン前面及翼舎形
興國寺大房	大雄寶殿前面	19.1	- 南楊州市別内面徳松里所在	
慶國寺大房	極楽寶殿前面	12.3	- 正面3間のクンバンにおいて大雄寶殿の姿は中央から認識	

- : クンバンの後ろの退間の内側にある柱の中心線から大雄殿の前の外側の柱の中心線までの距離 () 中はクンバンの後ろの外側の柱の中心線から大雄殿の前の外側の柱の中心線までの距離

強占期に建立された興國寺(高陽市所在)の大房の場合にも、このような大房構成寺院の一般的な進入方式や平面構成計画がそのまま取られたことが見られる。

3.2 外部空間特性

朝鮮時代末期以来建立されたもので現存する大房と主仏殿が共に構成されているソウル・京畿地域の寺院を対象として主仏殿に対する大房の位置及び主仏殿と大房間距離を表4で整理した。(図1参照)

図 1. 大房の外部空間距離計画及び前面翼舎の窓ざわで見た下向角概念図

表4に整理された15個所の寺院の中で元々配置がわからない石南寺、龍門寺、地蔵寺及び奉恩寺の場合を除外すると11個所の寺院すべてで大房は主仏殿の前に位置していること¹⁶⁾が見られる。またこの大房の位置がわかる11個所の寺院のなかで1971年に大房の位置が変えられた奉永寺の場合を除外したら、10個所の寺院で大房と主仏殿との距離が見られる。

大房と主仏殿との距離を探ることに於いてまず大房では大部分が念仏用のクンバンの前後面に退間¹⁷⁾が形成される。この時、後面の退間が退抹様に構成された興天寺、華溪寺、普光寺、興國寺(南楊州市所在)の場合のように、クンバン後面退間の内側から主仏殿を望むので、主仏殿と大房との間の距離はクンバン後面の退間の内側にある柱の中心線から主仏殿前面の柱の中心線までの距離を基準として整理した。これと共に龍宮寺の大房の場合クンバン後面に退間が無くて、彌陀寺の大房の場合クンバンの内側中間に柱が位置するから例外的にクンバン後面外側の柱の中心線から主仏殿前面の外側の柱の中心線までの距離にして、その距離を整理した。

この場合、主仏殿と大房との間の距離(L2)は全て22m以内になることがわかり、17~22mまでの範囲に入る場合を見ると日帝強占期に建立された興國寺(高陽市所在)を含んで7個所で大部分を占めていて、

その反対になる右側に構成されていることがわかり¹⁴⁾、クンバンの前に翼舎が構成される類型の場合プライバシーを要する接待用翼舎が同様に反対になる右側に構成されたことがわかる。そして進入路に向いて左側に台所が構成されたことが見られる。

一方寺院が位置する敷地の状況によって例外的に右側進入をしなければならない場合も4個所の寺院で見られる。主仏殿と大房が共に構成された彌陀寺及び清源寺や大房が主仏殿になる雲水庵及び明寂庵でこのような右側進入方式が見られる。このような寺院の大房でも化主用僧房はそのプライバシーの確保の為に進入路の反対になる左側に位置されていて、接待用翼舎が構成された雲水庵及び明寂庵の場合その翼舎はプライバシーの為に進入路の反対になる左側に構成されたことがわかる。そして進入路に向いて右側に台所が構成¹⁵⁾されたことがわかる。

従って朝鮮末期以来大房が構成されたソウル・京畿地域の寺院の場合、主仏殿と大房が共に構成された寺院や主仏殿が大房になる寺院すべてで中心領域の庭とかその後ろの仏殿へ接近する時、左側進入方式を取ることが一般的な原則であって、大房の空間構成要素の中でプライバシーが必要な化主用僧房と接待用翼舎に対して合理的に配慮して計画したことがわかる。そして日帝

残り3個所の寺では8～12mまでの範囲に入ることが見られる。

これと関連して人間の視知覚的特性を活用した劇場計画の場合、客席から舞台がよく見えることと同時に舞台上の台詞伝達がそのまま伝達される最大距離を22mまでと規定して第1次許容限度距離に決めていて、舞台上の演技者の表情までも理想的に感想ができる生理的限度としての可視距離を15mまでと決めている¹⁸⁾。

そして主仏殿と大房間距離(L2)を見ると、第1次許容限度としての22m以内に構成されている場合が7個所で、可視距離としての15m以内に構成されている場合が3個所で現われている¹⁹⁾。また龍宮寺、華溪寺、普光寺及び清源寺の場合²⁰⁾、クンパンの内部に仏壇を置かないで主仏殿を礼仏対象にして構成されている。

従って、このような大房と主仏殿との間の距離(L2)は主仏殿が大房の主要な礼仏対象として主要舞台になる意図的な距離として寺院の配置に適用されたことと解釈できる。

これと関連して大房のクンパンの内から主仏殿全体の姿が認識される所は前面が偶数間になっているクンパンの場合、その規模が正面2間になる龍宮寺大房では右側間から行われるが、その規模が正面4間になる大房では左側から二つ目の間で行われている華溪寺大房を除外したら残りの3棟では正中央から行われることが見られる²¹⁾。そして奇数間になっているクンパンの場合、その規模はすべて正面3間になっていることがわかり、この場合左側間から認識される見聖庵を除外したら残りの3棟では中央間から行われることが見られる。また日帝強占期に建立された興國寺(高陽市所在)の大房の場合にも前面3間になっているクンパンの中央間から主仏殿になる薬師殿が認識される(写真1参照)。従って一部例外もあるが、全体的にはクンパンの正中央を基準にして主仏殿と大房との距離が決められたことがわかる。

そしてその例外に属する場合を見ると、大房内のクンパンの前面が奇数間になっている見聖庵では大房の左側にこれより先に建立された大雄殿があって、この二軒の建物の基壇がほとんど相接していることが見られる(図2参照)。これはすなわち窟法堂を大房の主仏殿にして配置することに於いて敷地条件が大房内のクンパンの中央間に合わせることができない状況なので、クンパンと窟法堂との相互視覚的関係を最大限考慮して仕方なく成り立ったことがわかる。また大房内のクンパンの前面が偶数間²²⁾になっている華溪寺の場合にも中心領域配置を見ると、大雄殿の前面に形成される狭小な中庭を効果的に確保する必要性からクンパンの中央間ではなくて、左側から二つ目の間で大雄殿との視軸を構成したことがわかる。

従ってこのように大房のクンパンの内の中央から主仏殿の姿が認識されるように視軸が配置計画に適用されていることと共に、その視距離(L2)が第1次許容限度(22m)以内ないし可視距離(15m)以内として構成されていることから、過去クンパンの内部に仏壇が構成されなくて主仏殿を礼仏対象にした可能性も排除できない²³⁾、クンパンの内部に仏壇が構成されたとしても主仏殿をもっとも主要な礼仏対象にしようとする象徴的な意味が中心領域の配置計画に内在されていることと解釈することができる。

またこの大房と主仏殿の配置計画では、大房内のクンパンの正中央を視軸の基準にしながら人間の視覚的特性を考慮して相互配置する基本原則の以外に、周辺建物との関係や地形的な条件などの色々な状況を総合的に考慮して合理的に適用したことがわかる。

この地形的な条件までも総合的に考慮した実例として特に普光寺と興國寺(南陽州市所在)では大房を主仏殿と向かい合って配置しながら

表 5. 主仏殿の前面及び大房の前後面の庭の大きさ

大房 類型	寺及び 建物名	庭の大きさ(長さ x 奥行)		備考
		主仏殿と大房との間の庭 (A: 主仏殿の前の庭 B: 大房の後ろの庭)	大房の前の庭	
クン パン 前面 無堂 舎形	龍宮寺 大房	{ A: 14 x 7.7 B: 9~11 x 2.5 }	16 x 9~11	-
	瑞興寺 大房	17 x 3.9	-	- 大房の前は道に切り替わって以前の姿は把握困難
	清源寺 大房	{ A: 8 x 5 B: 13.4 x 8.1 }	-	- 大雄殿の前の基壇の場合セメントの下に葬られて基壇の姿は把握困難 - 大房の前の庭は狭小で、以前は広い駐車場が形成されていた、以前の姿は把握困難
クン パン 前面 有堂 舎形	見聖庵 大房	20 x 8.8	-	- 大房の前の庭は最近広い空地に変わって以前の姿は把握困難
	華溪寺 大房	17 x 8.5	17.2 [25] x 13.5~15	-
	普光寺 大房	18 x 12~14	22 [30] x 10~11	-
クン パン 前面 有堂 舎形	興國寺 大房	14.8m x 10m	13.7 [21] x 11.17	- 高陽市延平里所在 - 興國寺が構成された後の大房の場合この敷舎を利用して大房の前の庭を掘削しているが、ここではそれと異なして断続性が強く構成されていることが見られる。
	興天寺 大房	10.8 x 9	11 [24.5] x 9~11	-
	興國寺 大房	11 x 12	-	- 南陽州市別内面所在 - 大房の前の二重の基壇になって、下の基壇を庭に活用、これらの基壇の下に庭園が構成
クン パン 前面 有堂 舎形	興國寺 大房	24.5 x 5.6	8 [22] x 6.5	-

〔 〕の中は主仏殿と大房の間に別個の庭が形成されている場合、Aは主仏殿の前の庭の大きさ、Bは大房の後ろの庭の大きさを記入。また〔 〕の中は興舎が構成された大房の場合興舎の前の庭の広さを含む数値を記入

も地形上の等高線を配慮することによって、敢えて幾何学的な軸に固執しないで、地形毀損を最小限になるように幾らかの屈折軸を受容して大房を配置²⁴⁾することが見られる。

従ってこの分析内容を通じて大房の外部空間では合理的な視覚計画や総合的な周辺状況の考慮やこれによるからの環境親和的な配置計画が共に適用されて計画されていることを考察することができる。

一方主仏殿とその前の大房は庭を中に置いて中心領域を構成するので、主仏殿の前面と大房の後面の間に庭が構成²⁵⁾されていることがわかり、これと共に大房の前面にも大部分庭が構成されていることが見られる。表5ではこの庭の大きさを整理した。

表5に現れた庭の大きさを見ると、主仏殿と大房の間に位置した庭²⁶⁾の場合、その広さは11mから24mまで分布し、その奥行は4mから14mまで分布していて、どんな一定の規則性は見られない。

表5ではまた大房の前にある庭に対して探れる。これを見ると、その広さが8mから22mまで分布するし、その奥行は6.5mから15mまでとして15mの内に分布していて、多くはないが特にその奥行が11mを前後して集中している。そしてこれは日帝強占期に建立された興國寺(高陽市所在)の大房でも同様に適用されている。このように大房の前の庭の奥行が後ろの庭の奥行と比べてそんなに深くなく15m以内として11mを前後して構成されていることは翼樓の眺望機能を充足させるための計画に起因したと見ることができる²⁷⁾。この場合翼樓が構成された大房を対象にして、翼樓の前面の外側柱の中心線から庭の端までの長さ(L1)と翼樓の高さとの関係より、翼樓の窓ぎわに近寄って座って²⁸⁾見下ろした下向角(A)を整理したことが表6である。

表6から下向角(A)は30°以内として主に13°から24°までの範囲になっていて、これは日帝強占期に建立された興國寺(高陽市所在)の大房でも同様に適用されていることが見られる。さて人間の目において垂直面上の視界はほとんど60°だから²⁹⁾、視軸を中心にして30°以内の下向角の範囲に物体がある場合、頭または踵を動かなくても自然に見られることがわかる。従ってこの事実と共に接待用翼樓での眺望の重要性を考慮すると、その遺構数が充分ではないが、朝鮮時代末期から日帝強占期までの寺院の大房の場合、翼樓の高さと翼樓の前の庭の奥行は詳しく事物が見られる可視距離(15m)や見易く望むことができる下向角(A)を共に充足するように計画されたと解釈される。さらに可視距離の場合、その最大距離(15m)が翼樓の前ではなくて、クンパンの前面退抹楼の前で

表 6. 大房の翼楼の窓ぎわで見た視軸に対する下向角

大房 類型	寺刹及び 建物の 名称	翼楼前面の 庭の奥行・(l)	翼楼の 高さ・(h)	目の高さ (h+0.75)	下向角度	備考
クン パン 前面 単翼 舎形	見聖庵 大房	-	2.43	3.18	-	- 大房の前の庭は狭い空地に最近 建て以前の姿は把握困難
	華嚴寺 大房	12~13	2.25	3.0	13°~14°	-
	普光寺 大房	7~9.2	3.3	4.05	23.8°~30°	-
	興國寺 大房	10	2.4	3.15	17.5°	- 高陽市祇園洞所在
クン パン 前面 双翼 舎形	興天寺 大房	8.5~9.0(右側楼) 6.8~7.1(左側楼)	2.3	3.05	18.7°~19.7° 23.2°~24.2°	<(右側楼) <(左側楼)
	興國寺 大房	-	2.1	2.85	-	- 南陽州市別内面所在 - 大房の前面基壇の下に庭が構成
	慶園寺 大房	6.32	1.47	2.22	19.4°	-

- 距離及び高さの単位: m
 - 翼楼の前の庭の奥行: 翼楼前面の外廊柱の中心線から庭の終わるところまでの長さ(L)
 - 翼楼の高さ: 庭の表面(傾斜のある庭の場合、最低表面基準)から翼楼の床の上面までの高さ
 - 下向角 (目の高さにおいて視軸を中心にした下向角): $\tan^{-1} \{ (h+0.75) / l \}$

適用されていて、これから翼楼はもちろんのことで、大房のクンパンの前面退抹楼にも座って庭の端の花のような造景植栽を詳しく感想することができるように視覚的に配慮したことがわかる。

図 2. 見聖庵の中心領域配置図
(筆者略測図面) 写真 1. 高陽興國寺の大房の
クンパンの内から見た樂殿

4. 結論

19世紀から1945年までのソウル・京畿地域の寺院で新たに現れた新類型の仏殿になる大房を対象にして、その外部空間を分析して、次のような空間の特性がわかる。

まず、大房が構成された寺院での中庭進入は主仏殿と大房が共に構成された寺院も主仏殿が大房になる寺院のいずれの場合も左側進入方式を一般的な原則にした。

次に大房と主仏殿が共に構成されている寺院の場合、大房は主仏殿を実際或は象徴的な礼仏対象にして構成されている。その相互距離は全て22m以内で、主仏殿で佛教儀式が行われる時大房内のクンパンにいる人々がこれを視聴覚的に認識することができる距離以内に構成されている。

それで大房と主仏殿の間に位置した庭の場合、仏教行事の時多い群衆の収容と法要式舉行などに有効な外部空間に活用されるので、このような機能を収容しながら中心領域の地形的条件などを考慮して適切に構成されている。

これと共に翼楼が構成された大房では翼楼の高さと翼楼前面の庭の奥行の構成に於いて詳しく見られる可視距離(15m)や見易い眺望角度になる下向角(30°)を同時に充足させるように計画されていることが見られるので、大房の前の庭では眺望計画を重視してその空間が構成されたことがわかる。そしてこの事実から当時匠人が人間の視知覚的認知特性を充分に理解して外部空間の計画に適用した一端を見ることができる。

これから朝鮮時代末期当時、規模がある大房構成寺院の中心領域の配置計画を推定すると、主仏殿を大房の実際或は象徴的な礼仏対象にして、大房のクンパンと主仏殿の正中央を基準軸にしながら人間の視知覚的な認知距離を考慮して大房と主仏殿の位置を定めたと言うものである。これに地形毀損を最小限になるように地形的特性や周辺環境などを総合的に考慮してその建物を座らせると共に、その間には法会及び大衆の為の実際的用途の庭を、大房の前には眺望など休息機能の庭を設けると判断され、これは日帝強占期にも持続されたことがわかる。

謝辞

Let me thank Prof. Joo, Nam Chull of Korea Univ. who advised this paper and Prof. Katagiri Masao and Dr. Hamajima Kazunari of Nihon Univ. who gave me much advice and a chance of post-doctoral study.

注

- 1) 万日会田畠は念仏会開催時、念仏堂すなわち大房で万日間念仏会を維持することができるように、寺院とは別に全然独立的に経営された大房所屬の田畠である。
- 2) 高橋亨、李朝仏教、豊島：国書刊行会、昭和48年、p.774参照
- 3) 大房と関連して、既存の論文として、「A Study on the Characteristics of the Korean Buddhist Temples from the Mid-19th to the Mid-20th Century(金成都、高麗大博士学位請求論文)」では韓国の伝統的な仏殿と共に朝鮮時代末期新たにソウル・京畿地域に現れた仏殿になる大房を対象にして、当時の仏殿の特性が研究された。「A study on the Daebang Building in Temples of Seoul and Gyeonggi Province late in the Joseon Dynasty(朱南哲・金成都、大韓建築学会論文集)」では大房の形成背景と定義及び特性などが考察され、「A Study on the Daebang Design in Temples of Seoul and Gyeonggi Province in the Kojong Era(金成都・朱南哲、大韓建築学会論文集)」では高宗朝に建立された大房を対象にして大房の意匠上特性の分析と共に、当時大房以外の伝統的な寺院の仏殿との差異点も研究された。それで、「A Study on the Constitution and Transition of the Geonbong Temple in the late Joseon dynasty(金成都、大韓建築学会論文集)」では大房の起源に対して考察され、「A Study on the Characteristics of Space of the Daebang Building in Buddhist Temples of Seoul and Gyeonggi Province in the late Joseon Dynasty(金成都、Yonsei University Press)」では朝鮮時代末期の大房の内外部の空間の特性が発表された。また「A Study on the Characteristics of the Floor Plan of Daebang Building in Buddhist Temples of Seoul and Gyeonggi Province from the 19th to the Mid-20th Century(金成都・朱南哲、大韓建築学会論文集)」では進入動線及び機能計画と関連した大房の平面空間の特性が研究された。
- 4) 1910年以來から1945年まで大房が建立された記録がある寺では興龍寺(抱川郡二東面都平里28、1918年大房を建立したが、6・25戦争で焼失)、上院庵(楊平郡龍門面延壽里山72、1918年大房を建立したが、6・25戦争で焼失)、觀音寺(ソウル冠岳區南峴洞519-3、1924年大房建立)、戀主庵(果川市中央洞85-1、1929年大房15間再建)、奉國寺(ソウル城北區貞陵2洞637、1938年大房建立)、三聖庵(ソウル道峰區水輪2洞488、1943年大房建立)、奉元寺(ソウル西大門區奉元洞山1、1945年大房を増築したが、6・25戦争で焼失)などがあるが、この寺院の大房は現存しない。
- 5) 高陽市祇園洞に位置する興國寺の大房はクンパン(モンチェの大きい念仏用)前面単翼舎形で、今說法堂或いは彌陀殿とも呼ばれている。これについては金成都の「A Study on the Characteristics of the Korean Buddhist Temples from the Mid-19th to the Mid-20th Century」、p.127 参照
- 6) 「モンチェ(몽체)」は建築物に於いて中心になる部分を称する用語で、大房の前後面の翼舎のような突出した部分を除外した家屋の中心になる部分を意味。
- 7) 位置の場合、この論文では建物の前に位置した観察者の視点を中心にして整理。
- 8) これは寺院の経済力や接客の重要度に従って決められたことである。
金成都、前掲書、p.75~77 参照
- 9) 右側の接待用の翼楼を省略して、左側の僧侶休息用の翼楼だけで構成され

ることではないので、接客の重要性を知ることができる。

- 10) 一般的にクンバン前面の翼舎は傾斜地を活用して棲に構成されているが、雲水庵の大房では傾斜の無い平地に位置しているから、左側の翼舎が抹棲房に構成されて、右側の翼舎が温突房に構成されている変形した型式が見られる。一方内部を全て一つの部屋に改造する以前の興國寺(南楊州市所在)の大房では左側の翼舎が棲に構成されていて、右側の翼舎の場合は違って房に構成されているが、元々は左右兩翼舎全て棲に構成されたと思われる。
- 11) ここでは朝鮮時代末期に念仏堂の責任者として独立的な生活を営為したのみならず、その職を法孫に譲り渡して世襲した化主を言及する。“金成都、前掲書、p.78 註)171 参照”
- 12) 日帝強占期に建立された大房では奉恩寺選佛堂、開運寺大覺樓、興國寺彌陀殿(高陽市所在)がある。この中で開運寺の場合、大覺樓が移建されて元の配置を把握することができない。奉恩寺の場合、1982年に大雄殿が大きい規模で再建されてから、中心領域での以前の元の配置を把握することができない。従って興國寺だけで当時の配置計画を見ることができる。この場合現存遺構が1箇所しかないので、朝鮮末期建立された大房と比較して変化があるのかを中心に考察する。
- 13) 主仏殿は阿彌陀仏が奉安された極樂殿とか釈迦が奉安された大雄殿などのように、寺院の中でその位階が最高の仏殿を称する。またその他の様々な仏教殿閣を仏殿と称する。日本の場合、禅宗の仏殿、密教の本堂などを通称して、仏堂とすることは差がある。
- 14) これと共に化主用の僧房の場合、化主が念仏用のクンバンや接待用の棲を兩々相まって容易に管理ができるようにこれらの中に位置させて合理的に動線計画をしたことがわかる。またクンバンの側に位置した台所の場合、念仏大衆のための食事供養の便利を謀るように動線構成をしたことがわかる。これに対しては“A Study on the Characteristics of the Floor Plan of Daebang Building in Buddhist Temples of Seoul and Gyeonggi Province from the 19th to the Mid-20th Century” 参照
- 15) 雲水庵の大房の場合には右側に補助台所を左側に主台所を構成した特異な形態だが、今は左側の主台所だけがそのまま残っていて、右側のは部屋に改造されている状態である。奉恩寺の大房の場合も右側進入の場合であるが、朝鮮の初めの念仏宗利になる乾鳳寺のように、主仏殿が主な軸に構成されながら、大房もまた一つの軸に構成されて、二つの軸に構成されていることが見られる。それで大房の右側を通じて他の佛殿へ接近するように構成されている。
- 16) 龍門寺の場合、大房内部仏壇後面に出入門が構成された事実と大房が建立された1年後に大雄殿が立てられた事実から大房の後ろ側に主仏殿が構成されたことが推定された(金成都、前掲書、p.112、註)239参照)。この場合を包含すると11箇所の寺で主仏殿の前に大房が構成されたことが確認される。
- 17) 退閑は「モンチェ」の前後に構成された間で(張起仁、韓国建築辞典、普成閣、p.30 参照)、ここには退梁が構成される。
- 18) 建築資料研究會編、建築設計資料集成4、同友出版社、1984、p.123
これに関連してHarold Burris-Meyer及びF.G.Coleの場合にも俳優の扮装と表情の微細な変化が読み取れる限界距離を50フィート(15.24m)と規定していて、75フィート(22.86m)を最大可視距離と提案している (Joseph De Chiara・John Callender、Time-Saver Standards for Building Types、p.363参照)。
これは外部空間に対しても同様に適用されることが見られる。芦原義信は人間の顔の識別ができる外部空間に於いての距離を70～80フィート(21.336～24.384m)と規定しながら、大きい空間においてこのような範囲に材質の変化とかフロアの高さの差を置くくと生動感がある空間に新たになることをはっきりしている (芦原義信、建築の外部空間、p.56～59 参照)。
- 19) 人間の視知覚的認知特性を適用して、劇場建築の場合その内部の空間構成に活用することに対して、大房建立寺院の場合その外部の空間構成に活用することがわかる。当時大房建立寺院が都市の騒音源と隔離されて静かな山地に位置した地理的特性を活用して構成されたことがわかる。またこのような人間の視知覚的認知特性を主仏殿と大房間の距離計画に活用した事実から、当時匠人の合理的な思考体系の一端が読み取れる。これに関連して、メータ-法が使われる以前、人間の身体が建築計画の基準単位に成っていた時代に、長い年月を経て匠人が体得して活用した建築の数値計画の場合、今日のメータ-法を基準にして多くの人々を対象にして身体や視覚的特性などを分析した結果としての人体工学の結果と比較して、巨視的数値計画の側面で一致することがあるのは当然と言われる。このような観点から大房の外部空間の相互距離の分析を通じて、人間の視知覚的認知特性が当時の外部空間の計画に活用されたことを確認することができ、これは当時匠人が人間に関する特性を体系的に理解していることを立証する。それで大房と劇場計画いずれも人間を対象にしてその視知覚的特性を活用して計画することによって、その結果の一致することが見られる。
- 20) 特にこの寺の場合、主仏殿と大房との間の距離が第1次許容限度になる22m以内として、17～22mまでの間に構成されているのが注目になる。
- 21) 正面4間のクンバンの場合、正中央は柱が位置する。しかし大衆とか念仏僧が大房のクンバンの内から主仏殿を見ながら念仏をするとき、この中央柱のすぐ左右の間に構成された窓戸を通じて見渡すことは当然と言われる。この場合、主仏殿の正面の姿は大房から離れた距離と人間の目が持つ視覚的限界によって、クンバンの前面が奇数間になっている大房の場合とその認識に於いての差異が感じられないことがわかる。従ってこれとその必要な部屋の規模などを顧慮して計画されたと言われる。
- 22) クンバンの前面が偶数間になっている大房として主仏殿との視軸がクンバンの正中

央で形成していないことには華溪寺以外に龍宮寺もある。ところで大部分の大房内のクンバンの前面の規模は3間以上になっていることに対して龍宮寺の大房ではクンバンの前面がただ2間に構成されていて、クンバンの右側間の後ろの窓戸を明けたときその窓戸を通じて主仏殿の全体の姿が見られるようになっている。

- 23) 華溪寺の大房の場合、過去クンバンの内部に仏壇がなく大雄殿を礼仏対象にしたが、今はクンバンの内部に仏壇を設置しているところで、他の寺院の大房でもこのような可能性を排除できない。
- 24) また大房の前面に構成された翼舎の場合、大部分が地形の高低の差を利用して重層の翼棲に形成されている。しかし敷地が平らになっている雲水庵の場合、このような構成が困るから、敢えて敷地を切土とか盛土をして人工的に高低の差を作って重層の翼棲に構成しないで、平地でただ単層の翼舎に構成しながらフロアを抹棲房に作ったことも地形的状況を配慮した結果の一つと見られる。
- 25) 大部分の大房の後ろと主仏殿の前との間の空間に庭が形成されて中心領域が構成されるが、例外的に龍宮寺の場合大房の後ろにはほとんど通路に用いられる庭だけで構成されていて、主仏殿になる観音殿の前に重な庭が形成されていることが見られる。また清源寺では大房の後ろと主仏殿の前の間の空間に庭が形成されながらも主仏殿になる大雄殿の前に別個の小さい庭が構成されている。
- 26) 大房が建立されている寺院を含んで全ての韓国仏教寺院ではこの中心領域の庭が多い大衆を収容し、仏教行事の時法要式を行う有用な空間としての役割をする。
- 27) クンバン前面の右側の翼棲の機能は眺望及び接待のためのことで、これに対しては大房の形成背景と定義(金成都、前掲書、p.74～75)参照
- 28) 当時の韓国人を対象にして座っている時の目の高さの基準寸法に対しては催相慮の論文を参照した。彼は日本人になる久保が1913年に朝鮮の大人の身体を調査した資料をその基礎にしながら、1986年に発行された国民標準体位報告書の韓国の人体計測値を共に参考して朝鮮時代の韓国人の体位基準を搜し出した。これに因ると座っている時の目の高さは女の人の場合70.2cmで、男の人の場合76.8cmに算出されたが、この論文では人に因る差やいくらの融通性を考慮して座っている時の目の高さを二尺半になる75cmにした。
- 29) 芦原義信、前掲書、p.52

参考文献

- 1) 「見聖庵雨花樓記」、高宗23年(1882)
- 2) 「高靈山普光寺三重建樓上樑文」、高宗6年(1869)
- 3) 「興國寺萬歲樓房重建記功文」、高宗16年(1879)
- 4) 京畿道、京畿道指定文化財 實測調査報告書 上・下、1996
- 5) 京畿道、京畿道指定文化財 實測調査報告書、1989
- 6) 京畿道、畿内寺院誌、1988
- 7) 사찰문화연구원, 전통사찰총서Ⅲ 경기도, 사찰문화연구원출판국, 1993
- 8) 사찰문화연구원, 전통사찰총서Ⅳ 서울의 전통사찰, 사찰문화연구원출판국, 1996
- 9) 사찰문화연구원, 전통사찰총서Ⅴ 인천・경기도의 전통사찰 II, 사찰문화연구원출판국, 1995
- 10) 서울특별시, 奉恩寺 實測調査 報告書, 1990
- 11) 서울특별시, 華溪寺 實測調査 報告書, 1988
- 12) 서울특별시, 興天寺 實測調査 報告書, 1988
- 13) 水原市史編纂委員會, 水原市史, 1986
- 14) 芦原義信(Ashihara Yoshinobu)：建築の 外部空間, 기문당, 1985
- 15) 金成都, 「A Study on the Characteristics of the Korean Buddhist Temples from the Mid-19th to the Mid-20th Century - Focused on Seoul and Gyeonggi Province」, 高麗大博士學位請求論文, 1999.7
- 16) 金成都：A Study on the Characteristics of Space of the Daebang Building in Buddhist Temples of Seoul and Gyeonggi Province in the Late Joseon Dynasty, Post proceedings of the World Conference on Cultural Design, Yonsei University Press, pp.650～692, 2001
- 17) 金成都：A Study on the Constitution and Transition of the Geonbong Temple in the late Joseon dynasty, 大韓建築學會論文集, v.18, n.2, pp.101～108, 2002. 2.
- 18) 金成都, 朱南哲：A Study on the Daebang Building in Temples of Seoul and Gyeonggi Province late in the Joseon Dynasty, 大韓建築學會論文集, v.15, n.4, pp.163～171, 1999. 4.
- 19) 金成都, 朱南哲：A Study on the Characteristics of the Floor Plan of Daebang Building in Buddhist Temples of Seoul and Gyeonggi Province from the 19th to the Mid-20th Century, 大韓建築學會論文集, v.18, n.7, pp.67～74, 2002. 7.
- 20) 朱南哲, 金成都：A Study on the Daebang Building in Temples of Seoul and Gyeonggi Province late in the Joseon Dynasty, 大韓建築學會論文集 v.14, n.11, pp.229～240, 1998.11.
- 21) Choi, Sang-Hun：A Study on the Relationships between Human Dimensions and Interior Space of the Korean Traditional Residential Architecture, 大韓建築學會論文集 v.10, n.11, pp.189～198, 1994.11.
- 22) Chiara, Joseph De・Callender and John Hancock: Time-Saver Standards for Building Types, 2nd Edition, McGraw Hill Book Co., 1980

英文要約 (Summary)

Daebang in Seoul and Gyeonggi province, evolved from the ru(樓) which was located at the front of the main temple such as Geukrakbojeon(極樂寶殿) under the necessity of space for yeombul (i.e. pray to Buddha) and reception by the yeombul-prevalent and reception-valued social background in the late Joseon (Chosun) dynasty, was a temple for yeombul.

This building was made in the main domain of sachal (寺刹, i.e. a generic name of Buddhist precincts consisting of temple dormitories and various kinds of temple buildings) as one of 3 important temples together with Jwaseondang(坐禪堂, i.e. a generic name of temple building for meditation) and Ganghakdang (講學堂, i.e. a generic name of temple building for lecture) in those days. And under the financial support such as manilhe-jeondap (萬日會田菑, i.e. dry fields and paddy fields which were donated to the monk to support yeombul for 30 years), it was managed independently in a sachal by hwaju (化主; an official title of the monk in charge in those days). Therefore, the formation of space of this building having been affected by these, it became a complex temple equipped with a kitchen and monks' bedrooms in itself.

Daebang is composed of one keunbang (one large room for praying to Buddha), toetmaru(es) (退抹樓, i.e. the floor made in front or rear toetgan) made in front or in the rear or both in front and rear side of it, monks' rooms for hwaju and other priests, a right side wing room for guest reception and a left side wing room for monks' refreshment, and other auxiliary rooms such as storage and attic. Among these, a keunbang, toetmaru(es), a room for hwaju, a kitchen and auxiliary rooms are its basic elements and it could be divided into three types according to the number of projecting side wing room attached to the basic elements of it: First, there is a building type attached two side wing rooms in front of keunbang in addition to the common elements, for example those of Cheonchuksa, Heungcheonsa and so on. Second, there is a building type attached one side wing room in front of keunbang in addition to the common elements, for example those of Hwagyesa, Bogwangsa and so on. The third, there is a building type with no side wing room in front of keunbang, for example those of Weontongam, Yonggungsa and so on.

This study aims at finding out the characteristics of outer space of the daebang temple in Seoul and Gyeonggi province from the 19th to the mid 20th century by analyzing the existing 19 buildings.

This study shows that the daebang was a rational and green architecture and it could be summarized as follows:

The standard type of approach to the main domain in the sachal (寺刹) with daebang was the left-side access of daebang. In this case, both the master's room for hwaju and a projecting-side wing room for reception that needed privacy were on the right side, the opposite of the road, to secure a private life. With this, we could see that the rational planning of space was accomplished from the facts that by locating the hwaju's room between the side wing room for reception and the keunbang for yeombul it was possible for hwaju to control these two rooms effectively and by placing a kitchen beside a keunbang it was possible for servants to maximize a good service for food in its floor plan.

In the central domain in temples having been composed of both a main temple and a daebang, the former was regarded as a practical or symbolic worship object of the latter and these two buildings were settled within the distance of 75 feet each other. It is the maximum length between a stage and an auditorium for us to see and listen to the actors in designing a theatre. In an aspect of human visual perception, it is not different with the plan of a theater. With this, the degree of view looking downward at the front window of the side wing room(s) of daebang was usually within the limit of 30° and this downward angle permits us to look out easily without any movement of one's head or eyes, and the distance from the window of the side wing room to the brink of the front court of it was within the limits of 15m, the maximum length to see the details of the actors in designing a theater. These tell us that the architects in those days understood the characteristics of human optical perception and utilized it.

Besides these scientific and rational plan in which the human visual perception was considered, we could see a phase of green architecture from the facts that the exact geometric optical axis was not urged between a daebang and a main temple and these two buildings were placed in sympathy with the geographical features to preserve the nature, and, as a result, it was possible to minimize damage to the earth.

(2002年8月31日原稿受理, 2003年1月30日採用決定)